

今回の「草創期を語る」は、当時の記録や資料をもとに生活協同組合から財団法人に至るまでの経緯や病院が拡張されてきた歴史を振り返ります。また、開設当時を知る元職員の方々に落成式の写真などを見ながら、懐かしい思い出を語っていただきました。

草創期を語る Vol.2

記録を辿る

～松山市民病院設立からの変遷～



今年には財団法人永頼会が設立されてからちょうど半世紀になる。松山市民病院としては、前身の生活協同組合立の時代も含めて58年になる。その設立からの記録を辿ってみた。

戦後の復興途上にあった昭和29年当時、松山の城西地区には医療機関がなく、老人や幼児が大変困っていた。そこで、宇都宮周策氏（初代事務長）を中心に地元の有志が集まり、大手町にあった空き地を利用して「市民による市民のための病院」を作ろうということになり、手弁当で設立に奔走したようだ。設立の形態は、大衆の力と小さい資金で設立できる組合方式がいいだろうということになった。

資金を集めるには多くの組合員を集める必要があり、当時松山市議会議員（後に県会議員）の岡本博氏に協力を呼びかけ、大いに尽力してもらったようだ。

また、病院の体制を整えるため、井関農機の当時常務（のちに専務）であった薬師寺眞氏を理事長に、副理事長に月星ゴムの青木明氏と岡本氏が就くことになった。報酬はなく名誉職として関わっていたようである。

昭和31年の春に念願の病院が完成した。落成記念では盛大に餅撒きをして、地域の人たちと共に完成を祝ったようだ。落成式の集合写真には設立関係者や地元の有志の方々、初代院長のご家族をはじめ、着任医師や看護婦など従業員も一同に収まっている。

病院は内科と外科の医療部と保健衛生部の2部門で開院した。内科は藤井幸雄院長と富永弘先生、外科は横田公夫先生、そして看護婦長として赤松瑞枝さんが岡山から赴任してきた。開院時、許可病床が20床であったため、すぐに満床となり、翌年には30床に増床した。

保健衛生部は寄生虫の予防に取り組み、7人の従業員で毎月4～5千人の検便数をこなしていた。しかし、1件10円の検査料も生活困窮者は無料だったので運営は厳しい状況であったようである。

昭和32年8月、結核専門の愛生病院と合併し、松山市民病院が分院として運営することになった。分院の院長には岡山から結核専門の橋本誠志先生を迎えた。

その後も病院医療に対する需要は高まり、30床での運営が難しい中、周辺住民からは産婦人科や小児科開設の要望も数多く出ていた。そこで、病院周辺の土地を取得して増築する計画を立て、併せて産婦人科を開設することになった。設立からわずか3年で新しい病院棟の建築計画ができて上がり、昭和36年8月に135床の新病院棟が完成した（B病棟）。

（裏面へ続く）

昭和31年松山市民病院落成式



落成記念の餅をまく病院関係者と祝いに駆けつけた地域住民の方々

①藤井幸雄初代院長ご夫妻と2人の娘さん、②岡本博氏、③薬師寺眞氏、④青木明氏、⑤内科医長 富永弘先生、⑥外科医長 横田公夫先生、⑦宇都宮周策初代事務長、⑧赤松瑞枝初代総婦長、⑨柴田文子氏（裏面にて紹介）、⑩原田美智子氏（裏面にて紹介）

昭和30年代の街や人々の様子は西岸良平の漫画「三丁目の夕日」に描かれた風景が思い出され、意気盛んな頃だったことがうかがえる。当時患者さんは玄関の土間で草履に履き替えて、床に上がって診察を受けていた。